

強者の戦略

論述世界史〔2013 京都大学 第3問〕

こんにちは。研伸館の世界史の北林です。今回は京都大学の問題で19世紀のロシアとフランスを扱ったものにチャレンジしていただきました。

京都大学はかつて、イギリスとフランスの関係、イギリスとオランダの関係、アルザス・ロレーヌをめぐるドイツとフランスの関係など、**2国間の関係**をしばしば出題してきました。どれも決して難しくはありませんので、得点源とするため各国史の整理を一度はやっておいてください。

19世紀はヨーロッパのウィーン体制に目が行きがちですが、ロシアの拡大を考える際はユーラシア大陸全体を思い浮かべておかななくてはなりません。東京大学では2014年にユーラシア大陸全体でのロシアの拡大による各地の変化に関する出題がされています。いわゆる“グレートゲーム”などと言われたりする対立ですね。ロシアの領土を思い浮かべながら資料集などを見て確認しておいてください。

<時代背景を確認>

19世紀のヨーロッパは、フランス皇帝ナポレオンの時代から始まります。共和政の時代、彼はフランスの革命を守り、封建的圧政からの解放や自由・平等を掲げて戦いました。周辺諸国の民衆からすると英雄だったでしょう。しかし彼は1804年に皇帝に即位し(第一帝政始まる)、そのまま周辺諸国へ勢力を拡大し続けます。華やかな軍事的成功を収めますが、次第に周辺諸国ではナショナリズムが高まって反ナポレオンの動きが起り、じわりじわりと苦しめられます。例えばゲリラ戦を展開するスペインの反乱などではナポレオンは苦しめられ、最後まで鎮圧できませんでした。またロシア(モスクワ)遠征に大失敗し、それを機に各国は結束してナポレオンを倒しにいきます。ライプチヒの戦いなどに敗れたナポレオンは失脚し、エルバ島に流されます。ヨーロッパ

各国はウィーン会議を開き、戦後の新しい体制を模索しますが、各国の利害は衝突します。“会議は踊る、されど進まず”と言われました。エルバ島からナポレオンが脱出した後、ウィーン議定書が調印され、各国は結束してナポレオンと再び戦います。ワーテルローの戦いで敗北したナポレオンは、大西洋の孤島、セントヘレナ島へ流され生涯を終えます。

ヨーロッパではウィーン議定書によって決められた体制がスタートします。会議ではフランスのタレーランが提唱した「正統主義」をもとにした体制が考えられました。ウィーン体制では「正統主義に基づく、五大国を中心とした勢力均衡」を維持していくこととなります。

<問われていることを確認>

問いはすごくシンプルです。

時期：ウィーン会議から露仏同盟成立に至るまで
主問：フランスとロシアの関係の変遷

ウィーン会議からなので、議定書の調印より前から一言でも触れたいところです。「露仏同盟成立まで」なので、正式に調印されて軍事同盟となる1894年あたりまでとなります。

フランスとロシアの関係ですが、「関係」なので、手を取り合ったのか、対立したのか、ということを考えることとなります。

○ウィーン会議→ウィーン体制

一度目のナポレオンの失脚の後、ウィーン会議が開かれました。会議がなかなか進まない中で、ナポレオンが脱出し、各国はウィーン議定書に調印し、再度ナポレオンと戦います。もちろんここではフランスとロシアは敵です。

ワーテルローの戦いの後は、ウィーン体制を維持するためにつくられた四国同盟にフランスが入り五国同盟となります。五大国中心でこの保守反動体制を維持していこうとするんですね。対立の関係から、

強者の戦略

体制維持のために手を取り合うという形になります。

○東方問題

19世紀のロシアと言えば、ユーラシア大陸各地で南下を目指していきます。ロシアは黒海からボスフォラス・ダーダネルス両海峡を抜けて、東地中海へ抜けようとします。すると、エジプトを通してアジアへ行こうとするイギリスやフランスと対立をします。これが東方問題です。

東方問題は、ギリシア独立戦争、第一次エジプト＝トルコ戦争、第二次エジプト＝トルコ戦争、クリミア戦争、露土戦争と5つの戦争で構成されます。ギリシア独立戦争ではフランスもロシアもギリシア側につきます。ウィーン体制を維持する立場にいるはずの英・仏・露が独立を支持する側に回るということは、トルコ(オスマン帝国)を弱らせた方がいいという自らの利益のためです。五国同盟はどうなっているのか、という感じですが、ウィーン体制を守る気など全然ありませんね。

しかし聖地管理権問題を口実に始まったクリミア戦争では、フランスはトルコ側につき、ロシアと激戦を繰り広げます。「クリミア戦争はウィーン体制を完全に崩壊させた」と書く教科書もあり、「五大国を中心とする勢力均衡」はここで終わります。ロシアはクリミア戦争で敗北し、これを契機に近代化を模索することになります。

○19世紀後半のドイツのビスマルク外交

19世紀後半はドイツが統一され、ドイツの宰相ビスマルクが巧みな外交を展開します。鉄血政策で有名な彼ですが、ドイツは統一してすぐのため、戦争は極力したくない。そのためにフランスを孤立させ、他の列強と手を結んでフランスが攻めてこられないようにする、といったいわゆる「ビスマルク体制」を構築していきます。ドイツは特にロシアとの関係に意識を向けます。ロシアはドイツやオーストリアと三帝同盟を結成するものの、どうしてもバルカン

半島でのオーストリアとの対立があり、かなり脆い同盟で、何度か崩壊することもありました。ドイツはもしロシアを敵に回した場合、フランス・ロシアと二正面の対応をしないといけなくなります。そのため独露再保障条約を1887年に結成します。ロシアはドイツ側に組みすることになるので、ここでは露仏は仲良くはありません。

○1890年が転機となる

1890年、ドイツのビスマルクが引退し、皇帝ヴィルヘルム2世が親政を開始します。ヴィルヘルム2世の政策がヨーロッパを第一次世界大戦へ向かわせたと言って良いでしょう。1890年に、彼は独露再保障条約の更新をしませんでした。ロシアとドイツの関係は、少し距離が出来始めます。これを見たフランスはロシアに接近、露仏同盟を結成します。この同盟に、後に英仏協商と英露協商が合わさり、三国協商となって、第一次世界大戦前の対立の基本構造である三国同盟対三国協商という形が出来上がるわけです。

ざっと2国間の関係の流れを書きました。思い出しましたか？

では、以上をヒントに解答文を作成してみましょう。

強者の戦略

【解答例】

ロシアはナポレオンを打倒したが、ナポレオン戦争後のウィーン体制下で共に神聖同盟や五国同盟に参加し、反体制運動を厳しく弾圧した。しかしロシアが東方問題でイギリスと対立すると、ギリシア独立戦争では共同歩調をとっていた両国であったが、聖地管理権問題を機に勃発したクリミア戦争では対立した。その後ドイツ統一に成功したビスマルクによってフランスはヨーロッパで孤立し、逆にロシアは三帝同盟やその後の独露再保障条約で、ドイツとの関係を深めた。しかし 1890 年にビスマルクが引退しドイツ皇帝ヴィルヘルム 2 世の親政が始まると、ロシアは再保障条約の更新を拒否され、翌年フランスとの間に露仏同盟を締結するにいたった。

(295 字)

さて、みなさんの解答はいかがだったでしょうか？

論述問題の解答はもちろん一つではありませんので、「これはどうだろうか？」と気になるところが出てくると思います。その際は遠慮なく質問してください。

そして添削を希望される方も遠慮なくおっしゃってください。

ではまた次回、お会いしましょう

北林久忠